

<立卦から占断・応期までの簡単な流れを説明します。>

- ①時空を求める（万年暦か干支が記載されている暦を使います）
↓
- ②卦象を出す（納甲表を使います）
↓
- ③時空の五行の強弱（五行の生剋を使います）
↓
- ④本卦の格をもとめる（五行の生剋を使います）
↓
- ⑤卦内の爻の喜忌決定（五行の生剋および、十二支傷表などを使います）
↓
- ⑥用神を求める（①～⑤は用神の状態を求めるがためのものともいえる）
↓
- ⑦占断（判断）（相生、相剋、合、害、刑、絶、冲などを使います）
↓
- ⑧応期（時期）（十二支、五行などを使います。）

【① 時空を求める】

最初に、占う時を出します。何年何月何日の何時ということですが。

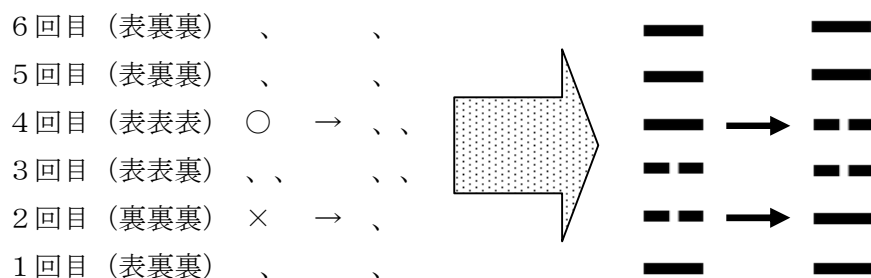
例えば、2011年2月10日12時とします。万年暦などを見て干支に変換します。

⇒辛卯年 庚寅月 丙申日 甲午時 と簡単にできます。干支に変換したものを専門用語で『時空』と呼びます。

【② 卦象を出す】

次に、銅銭やサイコロなどを用いて、自分の知りたい事などの質問に対しての『卦象』を求めます。

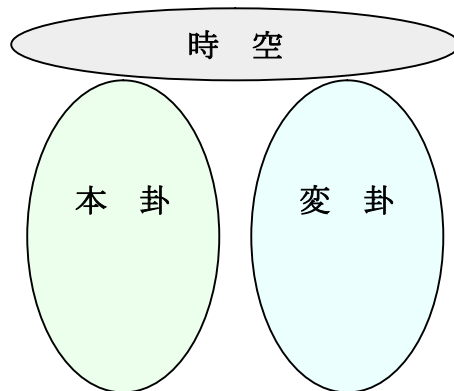
求めたかは、銅銭の場合を例にとると、質問の事柄を心に念じながら三枚の銅銭を手に持ち、空間を作りシャッフルして机などに落とします。そして表や裏の数を記入します。それを6回繰り返すと（詳しいことは省略しますが）下図のような卦象の基本ができます。



卦象の基本ができれば、納甲表を見ながら本卦象を作ると下のようになります。
この卦象をもとに占断をしていくのです。

辛卯年 庚寅月 丙申日 甲午時 辰巳空亡	辛卯年 庚寅月 丙申日 甲午時 辰巳空亡
天雷无妄・巽宮	天雷无妄・巽宮
妻財戌	妻財戌
官鬼申	官鬼申
子孫午 世爻 ⇒ 妻財未	子孫午 世爻 ⇒ 妻財未
妻財辰	妻財辰
兄弟寅 ⇒ 兄弟卯	兄弟寅 ⇒ 兄弟卯
父母子 応爻 子孫巳	父母子 応爻 子孫巳

卦象は時空、本卦、変卦と大きく3つに分けることができます。



次に、ここからが今まで日本に伝わっていないところ、秘伝の部分です。

【③ 時空の五行】

時空の五行の強弱を調べる。

ある規律をもとにして年月日の個々の支の五行の強弱を調べ、時空全体での五行の強さ（どの五行が強いか、あるいは弱いか）を出します。

事例の場合の、辛卯年 庚寅月 丙申日 では、卯=木、寅=木、申=金となり、規律をもとにすると、時空全体では木の五行が強いとわかります。

【④ 本卦の格を求める】

本卦は時空の影響を強く受けます。

このことをもとにして、本卦は巽宮で木の五行です。

時空は木の五行が強く、本卦の木五行は時空より強められています。このことから本卦の木五行は強い状態にあると判断できますので、強格であることがわかります。

【⑤ 爻の喜忌を求める】

本卦の五行の強さがわかれば、それをもとにして、卦内の爻が喜神であるか忌神であるかを見ます。各爻の支の五行が本卦に良い影響をしているものが喜神、悪い影響をしているのが忌神となります。喜神・忌神の求め方は五行の生剋を中心として、十二支傷表などを使います。

【⑥ 用神を求める】

すべての爻の喜忌が付け終わったら、卦内の爻から用神（中心爻）を求めます。用神とは事象や質問に対しての判断基準の中心となることです。この用神の喜神か忌神かを求めるがために、数々のステップを踏む必要があったのです。

【⑦ 占断】

そして判断に入りますが、この用神が喜神であった場合と、忌神であった場合とでは当然見方も変わってきます。また、隣接する爻などの影響も考えなければいけません。複雑なように見えますが慣れてくれば難しくありません。また、詳しく見るがゆえに的中率も高いといえます。

【⑧ 応期】

また、時空なども判断基準に加えると応期を求められます。応期とは事象や質問に対する答えがいつ発動するかなどの時期（年、月、日、時間）のことです。